

キャラクター名  
神音 杏菜(かみね あんな)

プレイヤー名

シンドローム	ハヌマーン モルフェウス		ワークス	ヤクザ	カヴァー	なし(ヤクザ)
	オプション		年齢	24歳	性別	女
覚醒	犠牲	衝動	闘争	初期侵食率	32 %	
出自	待ち望まれた子	経験	伝説	邂逅	生存	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	33
肉体	2	1	3			6	行動値	7
感覚	3	0	0			3	(非装備時)	7
精神	1	0	0			1	戦闘移動	12
社会	2	0	0			2	全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			RC			交渉		
回避			知覚			意志	1		調達	1	
運転:	2		芸術:			知識:			情報:裏社会	2	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
音速の刃 (100%↓武器作成込)	白兵	11r+1	3	10		C値8、浸食率+12
音速の刃 (100%↓)	白兵	11r+1	3	10		C値8、浸食率+9

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
コネ: 情報屋	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	消費	
Dロイス: 生還者P		N		
伝説の証人(組の私を慕ってる人)	P 信頼	N 不安		
家族	P 庇護	N 不安		
水銀寺 交流	P 同情	N 不快感		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
コンソレイト:モルフェウス	2	3	Xジャー	-	-	-	-	
効果: C値-LV(下限値7)								
インフィニティウェポン	3	3	マイナ	至近	自身	自動	-	
効果: 白兵攻撃武器作成、攻撃力+Lv+7、ガード値3								
カスタマイズ	3	2	Xジャー	武器	-	対決	-	
効果: 判定ダイス+Lv個								
一閃	1	2	Xジャー	武器	-	対決	-	
効果: 一瞬で敵に近づいて攻撃								
音速攻撃	2	2	Xジャー	武器	-	対決	-	
効果: 攻撃ダイス+Lv個								
アクロバット	3	2	リアクション	至近	自身	対決	-	
効果: ドッジダイス+Lv個								
サイコメトリー	1	1	Xジャー	-	-	-	-	
効果: ダイス+[Lv+2]個								
蝙蝠の耳	★	-	Xジャー	至近	自身	自動	-	
効果: 聴覚領域を拡大する								
軽功	★	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果: どこでも平地								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

髪型は右のサイドテール、金属製の髪飾り(母の形見)をしている。よくタバコを吸う、落ち着く。  
 服装は基本的にはパンツスーツ、暑いときはジャケット着ずに黒色カッターシャツ。  
 『ノアの伝説』(下記参照)により組は恐れられており、最近では平和である。  
 組を守ることが義務だと思っている、そのためならどんなこともする。  
 最初は髪飾りで刃を作成することしかできなかったが、特訓していく内に音速移動ができるようになった。  
 UGNよりも早くFHに保護されたためFHにお世話になっている。

子どもに恵まれず、跡継ぎがなかなか生まれないと悩んでいた頃にやっと私が生れた。  
 しかし私は女だ、あまり母は私を跡継ぎにさせようとしなかった。  
 それでも父は私を跡継ぎにさせようとして特訓をさせた。  
 父は刃を、母は女としての術を教えてくれた。そんな私を他の組の者は馬鹿にしていたようだ。  
 そんな日常がある日突然壊された。  
 組に恨みをもったものが幼い私の存在を知り、殺そうとしたのだ。  
 その場に居合わせたのが、私の母だけだった。女の幼い私と母、力が無いから余裕だと馬鹿にされた。  
 私に向けられた刃は庇った母に突き刺さった。母は私に微笑みながら死んでいった。  
 守るために父から教わってきたものが、何一つ生きなかった。  
 自分の無力さを噛み締めていた時、母のしていた髪飾りが転がってきた。  
 「これが刃だったら…こいつらを殺せるのに…」  
 私がそう言いながら髪飾りを握った瞬間、襲ってきたやつらの首がはねた。  
 私は凄いい力を、守る力を手に入れたのだ。  
 その後のことはあまり覚えていない、幼い頃の話だからな。  
 ただ私はその組を1人で壊滅させたい。その時の私の姿を見た者はこう語った。